

# 非科学的なものに対する一考察

坂田 義教\*

## 1. 問題提起

若者を中心に占いが流行している。フランチャイズド・チェーンとして「占いの館」が各地でオープンし、占い師の養成学校も、東京を皮切りに各地で開校の兆しを見せている。素人を対象とした「易占い教室」も、なかなかの盛況を呈している。週刊誌や新聞はこぞって占いのページを割き、また一方では情報化社会にふさわしく、その週の運勢をテープで流す電話サービスやパソコン用の占いソフトまで登場している。各大学では占いの愛好会がつきつきと結成され、街中では占いと食事をセットにしたパブレストランも誕生している。

それだけではない。書店では、占いと重複した「超能力入門」「超心靈学」といった専門書が好調な売れ行きを見せている。電話相談では、超能力者になりたいという中・高生が増えているという。「魔女の館」には、若い世代をターゲットにしたさまざまな魔法商品や霊現象の本が所狭しと並べられている。

こうした風潮は、ただ単に若者世代特有の現象ではない。被害者が後を断たない靈感商法や超能力で病気を治すという民間療法の台頭、あるいは超心理的原理を基盤とした新興宗教の興隆や霊界ブームの到来など、科学と対峙した神秘的・オカルト的なものへの傾斜は、否定しがたいひとつの社会的風俗として定着したかに見える。

科学万能の時代に、なぜ神秘的・オカルト的なものへの関心が高まってきたのか。その社会的背景というものを、占いと迷信に視点を当てて探ってみよう。

## 2. 非科学的傾斜の社会的背景

占いは、宗教の原始的形態としてのアニミズム (animism) やシャーマニズム (shamanism) と密接な関係をもっている。したがってそれは、呪術的・宗教的色彩のきわめて濃いものである。古代社会においては、こうした占いは特権的な支配階級の占有物であった。しかし、古代人は占いを今日のように玩具的な手段として弄んだわけではない。その呪術的・宗教的儀式は、戦争や重大事の極限状況において初めてその必要性が認識されたのであった。祭祀のみならず政治や軍事に至るまで、シャーマンとしてその力を誇示していた邪馬台国の卑弥呼に代表されるように、占いは高度なテクニックと修練、そして鋭い知力と洞察力を必要としたのであ

---

\*福岡工業大学教授、下関女子短期大学非常勤講師

た。それゆえにシャーマンは、超能力の保持者としてその地位を保障され、崇められ、そして畏怖の念さえ抱かれていたともいえよう。

こうした超能力や迷信（予知・禁忌・呪術・妖怪変化など）といった超常現象については、心理学、文化人類学、宗教学、生理学、物理学、生物学、天文学、精神分析学、民俗学等々、これまでさまざまな分野からのアプローチがなされてきた。

アメリカでは19世紀の半ばに、超心理学の基盤となる心靈主義が台頭してくるが、それ以降、心靈現象の研究が各国で盛んとなり、これが今日の心靈研究の先駆となっている。すでにイギリスでは1882年に、アメリカでは1885年にそれぞれS・P・R (The Society for Psychical Research) が開設され、テレパシー、透視、霊媒、予言、幻覚、念力、靈魂などの研究が開始されている<sup>1)</sup>。

わが国では大正時代に、英文学者・浅野和三郎氏による「心靈科学研究会」などがあったが、それは科学の対象外として学術的にはまだ市民権を得ることができなかった。なぜなら、M. モースが指摘するように、「科学はいずれもそのもっとも伝承的なものでさえ、なお実証的、経験的なものとみなされるのに対して、呪術的信念はつねに先駆的 (a priori) なもの<sup>2)</sup> とみなされるからである。したがってそれは、時として空疎な観念に陥る危険性を備えている。超能力や迷信が科学的根拠に欠けるものとして容認されがたいのも、そのあたりに原因があるといえよう。

しかし、だからといってそれを非科学的なものとしてむげに排斥することはできない。たとえば「念力」や「千里眼」にしても、アメリカのデューク大学 (Duke University) の J. B. ラインらが行った実験では、必ずしも「偶然」や「奇跡」だけで片付けられないことが判明している<sup>3)</sup>。

ソ連では、科学アカデミーで早くから超能力の研究が開始されていたが、最近ではアメリカ、イギリス、西ドイツ、中国などが競ってこうした超能力の研究に力を入れ始めており、そのため軍事的利用への憶測が飛び交うほどである。

わが国もその例外ではない。防衛大学校でも特別研究費を計上して、すでに超能力の研究を開始している。たとえば、「超常的体験の調査」(昭和158年)と銘打ったテレパシー、予知、念力、透視の研究事例は、その代表的なものである。

こうしたアプローチは、超能力や迷信といった超常的現象を非科学的なものとして一方的に排除してしまうのではなく、むしろそれを科学の上台の上に位置づけ、解明していくという点では、ひとつの重要な意義をもつものである。

ところで、非科学的なものへの傾斜が今、なぜ強くなってきたのか。そこにわれわれは、近代の合理主義によって割り切ることのできない現代社会の複雑さと、なおも残る非合理的なもの存在を垣間見ることができるともいえる。理路整然とした教義に立脚する既存宗教の間隙を

ぬって、神秘的・呪術的な新興宗教（たとえば真光系教団やオウム真理教）が人びとの心をとらえているのも、まさにそのことと関係する。たとえばホーソーン工場の実験が見事に描き出したように、フォーマルな組織の強化が、反動的に感情的・非合理的基盤に根ざすインフォーマルな組織の強化をもたらすのと同じように、近代的合理主義の徹底化もしくはその息づまりは、反動的に非合理主義への傾斜を濃厚なものとしていく。非科学的なものへの傾斜も、この事実と密接な関係をもっている。豊かな社会を覆う無気力で退廃的なムード、あるいは逆に、幻想的な豊かさのなかに潜む不安と緊張、将来を見据えることのできない不透明な時代といった要因は、非科学的なものへの傾斜を促す副次的な現象にすぎない。

### 3. 非科学的なものの功罪

占いや迷信は、前論理的なものとして排斥されがちだが、必ずしもそれが「悪」を意味するものではない。たとえば心霊術師による治療は、一般的に詐術として非難の対象となる傾向が強い。しかしそれは、「実質的効果」というよりもむしろ「心理的効果」という点では、否定できぬ役割を果たしている。今日、医師と患者のコミュニケーションの不足が叫ばれて久しいが、不治・難治の病に陥った者、あるいは医師に見放された患者にとっては、薬をもつかむ思いで心霊術にすがったとしても不思議ではない。それは心をなくした機械漬け、薬漬けという現代医学へのひとつの警鐘ともうけとれよう。その効果の正否がどうであれ、非科学的(?)な医術がはびこる存在理由も、そのあたりから説明できるものである。

未開社会におけるさまざまな呪術的儀礼においても、そのことは証明できる。未開社会においては、死活に関する重大事に直面したとき、呪術的儀礼をおこなうのが一般的である。たとえば狩猟時の呪術的儀礼は、豊猟を祈るという機能だけでなく、同時にそれは、狩猟前の心理的緊張状態を緩和するという機能を併せもつものである。という点では、B. マリノウスキーがトロブリアド島の調査で明らかにしたように、「呪術は宗教とともに、科学にとって代わるものではなく、その間隙を埋め、それによって心理的安定感をもたらすものにほかならない」<sup>9)</sup>のである。したがって、文明社会にとって滑稽に映る未開社会の呪術的儀礼も、たとえその因果関係が科学的合理主義によって否定されようとも、それは非教義的な自然観として有効に機能していることになる。

迷信についても同様なことはいえる。迷信は、それを生み出した社会的な価値観が色濃く反映している。現象学的立場に立てば、ある物体がその角度によって見え方を異にするように、迷信もまた相対的なものであって、何を規準にして正常とし、また何をもって異常とするかの識別は難しい。迷信のなかには科学的根拠をもつものも少なくないし、それを全面的に否定することは賢明なことではない。たとえば「北向きの窓は凶」という迷信は、冷たい北風によって

女性が月経不順に陥りやすいという点で確かな科学的根拠をもつものであるし、「ご飯を粗末にすると盲になる」という迷信は、子供に対する教育やしつけの面で大きな役割を果たしている。厄年にしても、身体的リズム（人生の節目）のパターンを年齢区分によって表わした古人の聡明な知恵と解釈できないこともない。

たとえば大安、仏滅、友引といった陰陽道にしても、それはまったくの迷信とさえいわれている。しかしわれわれは、結婚式には大安を選択し、葬儀には友引を避けようとする。建築物の起工式には神官のお祓いを受け、ドライバーは事故防止のためにお札やお守りをもらいに行く。無益なことと分かっているにもかかわらずの内にこうした迷信は、社会的慣行・社会的習俗として容認され、受け継がれ、そしてついには制度的な社会規範に比肩するほどに人びとの行動を律するものとなっている。ある意味ではそうした行動様式が、未開社会における呪術的儀礼と同じような「心理的効果」を生み出しているのである。

しかし一方では、容認されがたい数多くの迷信が存在することも確かである。

「祝い合わせ苦に自殺」\*1（昭和56年・長崎県）、「2児母に殺される — 悪い占い信じ凶行」（昭和56年・石川県）、「厄年、小さな事に胸さわぐ — 義兄が42歳で急死して弱気に」（昭和57年・大阪府）、「評判よくない兄の彼女 — 母に因縁が原因では」（昭和58年・兵庫県）、「悪い霊払い青年死なす — 布団巻き殴るける」（昭和59年・大分県）、「悪霊除くと孫絞め殺す — 新興宗教信心の祖母」（昭和62年・千葉県）……。

新聞の見出しを拾い出してみても、迷信にまつわる悩みや非劇は枚挙にいとまがないほど数多く発生している。アメリカでも、息子の足の障害を神の祟りとして手術拒否をした父親に対して、最高裁が介入するという事件や、「黒魔術」\*2のメンバーによるオカルト的な怪奇事件が後を断たない。

われわれにとって必要なことは、有利性のある迷信と有害性のある迷信との明確な識別である。たとえば「七夕まつり」を一種の迷信としてとらえれば、それは人びとに夢とロマンを与える美しい民間伝承 (folklore) として、むしろ社会生活の潤滑油的な機能を果たすものである。しかし、たとえば「愚きもの」の家と名ざされた家との交際や縁組はなされないという、いわゆる山陰地方に濃厚な「愚きもの信仰」は、社会に実害を与えるものとして、もはや狂信 (fanaticism) の範疇に属するものである。それは、社会解体にもつながりかねないという点では、ひとつの社会病理現象を呈している。人形に五寸釘を打って相手を呪い殺すという呪術的

\* 1. 冠婚葬祭の重なった商店は、半年から1年間、仕事の注文をしてはいけないという習わし。

\* 2. 悪魔の力を借りて現世的な欲望を可能にするという「黒魔術」(black magic)。これに対して、大自然や神々の力を借りて幸福を実現するという「白魔術」(white magic)。黒魔術の呪術的儀式は、中世ヨーロッパの邪教儀式を連想させる。

迷信\*3、人の不幸に付け入って、壺、印鑑、多宝塔を売りつける霊感商法なども、迷信のもつマイナ斯的側面といえよう。

こうした有害性のある迷信は、極力排除されなければならない。「人間の未知のもの、不可解なものを、すべて簡単に迷信の因果律で説明し納得してゆくという態度を否定してゆくのであれば、迷信からの解放はありえない」<sup>9)</sup>のである。

#### 4. 非科学的なものに対する意識調査の概要

科学万能の時代に、若者たちが非科学的なものに対してどのような意識をもっているのか、という問題提起のもとに、福岡県・山口県下の大学を対象に「非科学的なものに対する意識調査」を実施した。

##### 4・1. 調査方法

△ サンプル数：600（女性300，男性300）

△ 調査対象の大学と、その人数：福岡工業大学（150），福岡教育大学（50），九州工業大学（50），北九州大学（50），水産大学校（100），下関女子短期大学（200）

△ 調査方法：受講生に質問紙を配布。その場で回収ということで回収率100%。

##### 4・2. 調査結果

非科学的なものに関して、表1のような18の設問を試みた。調査票右端の数字は、各質問項目別にとらえた集計結果の数値である。

##### 4・3. 調査結果の分析

科学万能の時代といえども、「神秘的なものの存在」を認める学生は、79%を占めた。さらに「神秘的なものの存在」を、さまざまな超能力や靈魂などに分類し、具体的に学生の意識を探ってみた。「超能力の存在」は60%の学生が認めているが、「スプーン曲げ」「心靈手術」「霊媒術」に対しては不信感が強く、否定的意見の方が大勢を占めている。ただ、信仰心のない学生（51%）や無宗教の学生（81%）が多いなかで、「靈魂の存在」や「死後の世界の存在」を信じている学生が多いのは、興味深い。

厄年は、本人がその年齢に達してみないと逼迫感がないと思われるが、現時点では35%の学生が「信じる」としている。

大安とか仏滅とかいった縁起は、日常生活のなかに慣習的儀礼として深く浸透しているだけに、若者たちの間にも根強いものがある。

---

\*3 このような悪習は、あらゆる社会に普遍的に見られる現象である。たとえばメラネシアのドブ島でも、他人を呪ったり傷つけたりする邪術が存在している。

表1 調査票と集計結果

## 非科学的なものに対する意識調査

- Q1. この地球で、科学では説明のつかない神秘的なものの存在を信じますか。
- | 回答率          |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 79% |
| ロ. 信じない      | 5%  |
| ハ. どちらともいえない | 16% |
- Q2. テレパシー、予知、透視、念力といった超能力を信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 60% |
| ロ. 信じない      | 19% |
| ハ. どちらともいえない | 21% |
- Q3. 念力によるスプーン曲げを信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 33% |
| ロ. 信じない      | 45% |
| ハ. どちらともいえない | 22% |
- Q4. 心霊手術を信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 16% |
| ロ. 信じない      | 56% |
| ハ. どちらともいえない | 28% |
- Q5. 祈祷師などによる霊媒術を信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 30% |
| ロ. 信じない      | 40% |
| ハ. どちらともいえない | 30% |
- Q6. 霊魂の存在を信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 69% |
| ロ. 信じない      | 14% |
| ハ. どちらともいえない | 17% |
- Q7. 死後の世界は存在すると思いますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 思う        | 49% |
| ロ. 思わない      | 26% |
| ハ. どちらともいえない | 25% |
- Q8. 男の大厄（42歳）、女の大厄（33歳）といったものを信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 35% |
| ロ. 信じない      | 37% |
| ハ. どちらともいえない | 28% |
- Q9. 暦の陰陽道における大安、仏滅、赤口、友引、先負といったものを信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 51% |
| ロ. 信じない      | 24% |
| ハ. どちらともいえない | 25% |
- Q10. 実際に事故とか悪い知らせ、悪い事態の前に、胸さわぎとか悪い夢を見たという経験がありますか。
- |       |     |
|-------|-----|
| イ. ある | 31% |
| ロ. ない | 69% |
- Q11. 受験の時に、お寺や神社に合格祈願に行った経験がありますか。
- |       |     |
|-------|-----|
| イ. ある | 76% |
| ロ. ない | 24% |
- Q12. 朝や晩に、神様や仏様に手を合わせますか（お祈りをする）。
- |         |     |
|---------|-----|
| イ. 毎日行う | 10% |
| ロ. 時々行う | 39% |
| ハ. 行わない | 51% |
- Q13. 占いは好きですか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 好き（理由： ）  | 66% |
| ロ. 嫌い（理由： ）  | 21% |
| ハ. どちらともいえない | 13% |
- Q14. （好き嫌いは別として）占いを信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 28% |
| ロ. 信じない      | 27% |
| ハ. どちらともいえない | 45% |
- Q15. 雑誌、週間誌、新聞等で占いの記事を読みますか。
- |         |     |
|---------|-----|
| イ. よく読む | 47% |
| ロ. 時々読む | 42% |
| ハ. 読まない | 11% |
- Q16. 実際に占い師から占ってもらった経験がありますか。
- |                        |     |
|------------------------|-----|
| イ. ある<br>(占ってもらった内容： ) | 27% |
| ロ. ない                  | 73% |
- Q17. 何か宗教を信仰していますか。
- |            |     |
|------------|-----|
| イ. 信仰している  | 19% |
| ロ. 信仰していない | 81% |
- Q18. UFOの存在を信じますか。
- |              |     |
|--------------|-----|
| イ. 信じる       | 59% |
| ロ. 信じない      | 19% |
| ハ. どちらともいえない | 22% |

質問10の「胸さわぎ」とか「虫の知らせ」といったものは、3人に1人が経験しており、科学と乖離した現象として注目したい。「合格祈願」は苦しい時の神だのみということで、無宗教の学生が大勢を占めているにもかかわらず、実に76%の者が経験をしていた。

次に「占い」であるが、神秘的な占いを若者向けにアレンジした、いわゆる「占いの大衆化とファッション化」が進行しているだけに、占いが「好き」だと回答した学生は66%を占めた。

自由回答法 (open answer) によって得られた「好き」「嫌い」の理由は以下の通りである。

「好き」の理由

- ① 楽しい、おもしろい、夢があるから …… 38%
- ② 当たるから …… 18%
- ③ 良いことが予言されるとうれしいから …… 12%
- ④ 自分を客観的に見てみたいから …… 9%
- ⑤ 自分の未来がわかるから …… 8%
- ⑥ 行動の指針となるから …… 7%

「嫌い」の理由

- ① 当たったことがないから …… 33%
- ② 信じていないから …… 22%
- ③ 結果が怖いから …… 9%
- ④ 自分の道は自分で切り開きたいから …… 6%
- ⑤ 未来は知りたくないから …… 5%
- ⑥ 非現実的だから …… 4%

占いを「好き」であることと「信じる」こととは別問題としてQ14を設けてみたが、実際に「信じている」という学生は28%にすぎなかった（「信じない」という学生は27%、「どちらともいえない」という学生は45%）。そこに、ある程度レジャー化した占いの実態が浮き彫りにされているといえよう。

「占いの記事を読むか」の質問に対しては、89%の学生が「読む」と回答している。占い記事の“value”も、このあたりに原因がありそうである。

占い師から実際に「占ってもらった」という学生は、約4人に1人の割合であった。「何を占ってもらったか」の質問に対しては、進学、進路、就職、学業、適性、恋愛、結婚、人間関係、家族、祖先、家系、土地、病気、健康、性格、未来の運勢、金運、開運などさまざまなケースがあったが、とりわけ次の内容が大きなウエートを占めた。

- |             |                |            |
|-------------|----------------|------------|
| ① 恋愛 …… 48% | ② 未来の運勢 …… 21% | ③ 就職 …… 7% |
| ④ 結婚 …… 4%  | ⑤ 性格 …… 3%     |            |

さまざまな学生の意見を概括すると、占いに走る主観的条件は、概ね次のカテゴリーに分類で

きよう。

- ① 除災招福志向——不安・悩み・苦痛からの解放を志向するタイプ
- ② 遊び志向——単なる好奇心や暇つぶしを志向するタイプ
- ③ 脱日常性志向——未知の世界や異次元の世界の体験を志向するタイプ
- ④ 自己客観視志向——自己の再確認や自己変革を志向するタイプ
- ⑤ 短絡的問題解決志向——努力を放棄し、運命や宿命によって物事の解決を志向するタイプ
- ⑥ コンサルティング志向——重大事に関する情報（意見やアドバイス）収集を志向するタイプ

#### 4・4. 調査の終わりとして

この調査は、調査対象の属性に極端な類似性があるため、クロス集計は避け、単純集計のみとした。ただ概観すると、信仰心の強い学生に当然ながら、「靈魂の存在」や「死後の世界の存在」を肯定する意見が強く見られた。また表2に示されるように、女性の方が超能力、迷信、占い等に過敏であることが明らかとなった。たとえば「大厄を信じる」「占いを信じる」では、女性は男性の約2倍の割合を示し、「占ってもらった経験」も、女性の方が約5倍の数値を示した。また「お祈りをする」という信仰心も、男性より女性の方がはるかに高い比率を示した。

UFOの存在を非科学的なものとするには問題があるが、興味深い調査対象として、最後に設問を試みてみた。UFOブームに乗って、59%の学生がその存在を肯定した。

表2. 各質問に対する肯定的意見の男女比較

性別 質問	性別		性別 質問	性別	
	男	女		男	女
Q 1	37%	42%	Q 10	13%	18%
Q 2	25%	35%	Q 11	36%	40%
Q 3	14%	19%	Q 12	1%	9%
Q 4	8%	8%	Q 13	27%	39%
Q 5	13%	17%	Q 14	9%	19%
Q 6	31%	38%	Q 15	42%	47%
Q 7	20%	29%	Q 16	4%	23%
Q 8	12%	23%	Q 17	9%	10%
Q 9	21%	30%	Q 18	34%	25%

## 5. 若干の提言

最近の若者たちのなかには、厳しい現実との対決を避け、自分の苦勞を先に延ばしていくという、いわゆるモラトリアム (moratorium) 人間が増えている。大学での就職相談においても、カウンセラーにまったく依存的で、「掘り出しものでもあればもらって帰ろうか」といった他人

志向型的な傾向が顕著である。つまり、自立して生きる気構えに欠け、自分で実践的に行動しようとしないのである。

いま流行している占いについても、同じことがいえる。自分の将来は、自分自身が選択するという前向きの姿勢を放棄し、自分の弱さや欠点を超能力的なものでカバーしたり、身の不運や努力の不足を、安易に運命や因縁に帰したりもする。登校拒否の原因を、「子供に先祖の霊がついているから」としてお祓いを強要した小学校の女教諭（昭和63年・熊本県）のケースは、まさに教育者としての本質的な努力を怠り、因果関係を非科学的な宿命に求めたひとつのケースである。占いの台頭も、実はそのあたりに原因があるのかもしれない。

しかし、新聞広告で募ったにわか仕込みの「巫女」たちに、われわれの大事な一生を軽々しく論じられたのでは、たまったものではない。われわれは、もう少ししっかりと地に足をつけ、自分の人生を自分の目でじっくりと見据えていきたいものである。

## 文献

- 1) 大河内一男他監修：事典・現代を考える，読売新聞社，1968，pp. 376～380
- 2) M. Mauss：社会学と人類学（有地弘文堂、享他訳）(Sociologie et Anthropologie)，1982，pp. 149～150
- 3) 宮城音弥他編：心理学事典，平凡社，1969，p. 486
- 4) 祖父江孝男編：文化人類学，有斐閣，1981，p. 89
- 5) 相良守次他編：異常社会の心理，中山書店，1961，p. 287